

2023年度事業報告

1. 第44回大会の開催

第44回大会 期日：2023年6月10日(土)～11日(日) 場所：東京都立大学 大会準備委員長：岡村郁子会員、参加申し込み286名、個人発表42件(うち英語による発表6件)、共同発表5組(うち英語による発表1組)、ケースパネル2組、ポスター発表26組(うち英語による発表1組)合計75件の発表があった。

2. 『異文化間教育』第58号、第59号の編集と刊行(学会誌編集委員会)

第58号：2023年8月に刊行した。

第59号：2024年3月に刊行した。

第60号：2024年8月に刊行予定。

第61号：2025年3月に刊行予定。

第62号：投稿募集中。

3. 特定課題研究の企画・実施、公開研究会の開催、優秀発表賞の実施(研究委員会)

2024年度の特定課題研究は、「乳幼児期に異文化間で育つとはどういうことかー複層的な視点でとらえるー」をテーマとし、本年度も公募形式で発表登壇者を募った。5件の申し込みの中から子どもを取り巻く教育環境に焦点を当てる研究者2名、長江侑紀会員(東京大学)、田尻由起会員(昭和女子大学)を登壇者、指定討論者として塘利枝子会員(同志社女子大学)に決定した。

【第一回公開研究会】

2023年1月8日(日) 16:00～18:00にオンラインで実施した。最大29名(内研究委員関係者8名)の参加があった。長江侑紀会員は「子育てを協働する保育者の異文化間コンピテンス：多様な文化的背景のある子どもが通う保育施設からの示唆」と題した研究発表を行った。保育者と外国にルーツを持つ保護者の協働における異文化間コミュニケーション及びこれをめぐる諸課題、そして双方の対象者に求められる異文化間コンピテンスとは何かという問いを立て、エスノグラフィ手法で得た現場での経験をもとに議論した。田尻由起会員は「文化的マイノリティとして発達障がい児を育てるとは一フランスでの事例を通して」と題した研究発表を行った。異文化、異国で子育てをする際に障がいのある乳幼児親子への発達の支援や課題などについて議論した。各発表後に、指定討論者である塘利枝子会員が改めて乳幼児期に異文化間環境で育つことの意味とそこからどのように複層的な視点へ発展するかを議論を提示し、今後どのようにデータを整理させ、研究を発展させていく必要があるかという点について論じた。

【第二回公開研究会】

2024年3月24日(日) 13:00～15:00にハイブリッド形式にて実施した。16名(内研究委員関係者8名)の参加があった。長江侑紀会員が、「多様な文化的背景のある子どもの子育てを協働する保育者の省察：批判的人種理論を援用したクリティカル・ペダゴジーからの示唆」と題した研究発表を行った。フィールド調査によって得られたデータの分析結果から保育者のクリティカル・ペダゴジーの実践とクリティカル・ペダゴジーを支える仕組みについて報告がなされた。田尻由起会員は、「文化的マイノリティとして発達に心配のある子どもを育てるとは一フランスでの事例を通して」と題した研究発表を行った。子どもの発達に不安を持つ邦人母親の子どもの発達の遅れや偏りへの気づきから就学までの期間における支援をめぐる多様な経緯・困難感などの経験、子育てを取り巻く状況について報告がなされた。各発表後に、指定討論者である塘利枝子会員からは、乳幼児期とその後の育ちの場との連続性、複層的な視点、子どもをめぐる人々の間の捉え方の違いは子どもの育ちにどのような意味をもたらすのか、組織や地域が変わるためには何が必要かという4点において、議論の提起がなされた。同じく指定討論者の内田千春会員からは、「子どもをとりまく環境を捉える視点」「場を捉える、研究者の様々な理論的視点」「子どもの声、姿、行動を捉える視点」の重要性が指摘された。

【優秀発表賞の実施】

第44回大会で実施した。優秀発表賞審査委員会が審査をした結果、中村絵里会員(千葉大学)

「客観的測定テストBEVIを用いた全員留学の評価—国際・文化体験への関心が低い学生の留学効果—」に決定した。優秀発表賞受賞者の中村絵里会員には、賞状および副賞が第45回大会総会にて授与される。

4. 研修会、アーカイブ、オンライン読書会の企画・実施（企画委員会）

【第34回異文化間教育学会研修会】

2024年2月13日（火）10時30分～14時30分に、愛知朝鮮中高級学校（愛知県豊明市）にて第34回異文化間教育学会研修会を開催した。本研修では長らく中部地方の民族教育を担ってきた愛知

朝鮮中高級学校のあゆみを通して、民族教育に対する理解を深めることを目的とした。参加者は19

名（企画委員5名含む）であった。在日朝鮮人としてのアイデンティティ育成を中心に据え、新しい時代を切り開く人材の輩出を目指してきた当校のあゆみを学ぶことができた。参加者からは研修

会の充実ぶりがうかがえる感想が多数寄せられた。

【アーカイブ】

異文化間教育学会の発展に大きな役割を果たした会員の研究ヒストリーを対談形式で伺い、テキスト

ト及び動画データとして記録した。

第3回 2024年3月18日（月）14:00～16:00 西原鈴子会員（聞き手 齋藤ひろみ会員）

【オンライン読書会】

▶『沖縄のアメラジアン—移動と「ダブル」の社会学的研究—』（2022）ミネルヴァ書房

著者：野入直美

2023年11月4日（土）10:00～11:45に開催し、参加者は13名であった。

▶『日本型多文化教育とは何か—「日本人性」を問い直す学びのデザイン—』（2023）明石書店

著者：松尾知明

2024年3月13日（水）12:00～13:30に開催し、参加者は22名であった。

▶『ケースで考える！誰も教えてくれない日本語教育の現場』（2023）ココ出版

著者：瀬尾匡輝・瀬尾悠希子

2024年5月11日（土）10:00～12:00 に開催され、参加者は27名であった。

5. ニュースレター、メールニュースの編集と配信（事務局、広報・ICT委員会）

2023年12月1日付でニュースレター第71号をHPに掲載した。また、「異文化間教育学会メールニュース」の配信は、学会活動や会員間交流に関する情報メールを175件会員へ配信した。

6. ウェブサイトの更新・改修とオンラインによる活動の充実（広報・ICT委員会・事務局）

ウェブサイトのマイページのリニューアルを行い、資料蔵も新たに開設した。73件のHP更新をおこない、情報を掲載した。他の委員会と連携し、オンライン講演会のデジタル配信を行った。

7. 研究成果の発信促進（グローバル展開委員会）

第45回大会の英語セッション発表申込を行い、個人発表6件、共同発表1件、ポスター発表2件の申し込みがあった。発表後、大学院生対象にフィードバックを行う。

8. 海外研究者との交流、海外の関係学術団体・機関との連携（グローバル展開委員会）

海外の学会での発表経験および英文雑誌投稿経験の実態調査アンケートを行った。60件の回答があり、海外学会での発表経験（有41名、無19名）、英語の学術雑誌への投稿（有23名、無37名）であった。

9. 会員間の交流・ネットワーキングの促進、会員のキャリア・プランニングの支援（ネットワーキング委員会）

【第44回大会交流会】

2023年6月10日(土) 12:00~13:00、「ふらっと交流サロン」を開催した。参加者25名(内委員4名)であった。柔らかい雰囲気の中、色々な人と気軽に交流ができ、ネットワーク作りに役立った。また、研究・実践を共に深める仲間づくりができた。

【第1回ネットワーキング交流会】

2023年11月11日(土) 13:00-16:00、「異文化間教育に関わる方々のためのキャリア・ライフプランニングワークショップ」をオンラインで開催した。参加者21名(内委員5名)であった。参加者にこれまで異文化間教育に関してやりがいや面白みを感じたエピソードを小グループでシェアしてもらうことで、改めて自分の教育実践や研究に大切なことを意識してもらうと同時に、グループ内でのフィードバックを通して参加者同士の相互理解を深められることを主な目的とした。自分の価値観や興味を改めて意識でき、参加者同士の理解や繋がりを深められた。

【第2回ネットワーキング交流会】

2024年2月17日(土) 13:00~15:10、「研究・実践・キャリアお悩み相談ゼミ」をオンラインで開催した。参加者19名(内委員5名)であった。発表者については研究や教育実践、キャリアに関する大きなヒントをもらえたという感想のみならず、メンバーの研究や教育に対する熱意からモチベーションをもらった、自分一人ではなく同じ問題意識を持った人たちがいることを実感できたなど、情緒面や動機づけの面からも大きな意味があったことが窺える。今回はキャリアのテーマを加えたことで、発表者およびメンバーの仕事へのやりがいや、1人1人の働き方や生き方までグループ内で共有できた。

10. 教育関連学会連絡協議会の参加(ネットワーキング委員会)

2024年3月9日(土) 教育関連学会連絡協議会総会に参加した。

11. 学会の中長期的な展望やその実現可能性の構想(将来構想委員会)

「異文化間教育事典」のプラットフォーム化、ワークブックの作成に向け準備をした。

12. 学会論文賞の選考(学会論文賞選考委員会)

学会誌56号(2022年)~59号(2023年)に掲載された研究論文(テーマ論文・自由投稿論文)、実践報告、調査報告、研究ノートのうち、依頼論文以外の選考対象13本の予備審査を行った。

13. プレセミナーの実施(事務局)

2023年6月9日(金) 13:00~17:00 「オートエスノグラフィーで自文化を描く」というテーマでプレセミナーが行われた。参加者は27名であった。講師に土元哲平氏(日本学術振興会・大阪大学)、アシスタントに大川ヘナン会員(大阪大学大学院)に依頼した。「オートエスノグラフィーで自文化を描く」ということを考え、理論を知り、そして実践をもって参加者それぞれの次にひらかれよう学びができた。

14. 学生会員支援事業(事務局)

第44回大会において、若手研究者支援の一環として、条件を満たす年次大会発表者の大会参加費を免除(返金)した。エントリー者1名が手続きをした。

15. 会員数

2024年3月31日現在の会員数は、名誉会員15名、正会員801名、学生会員141名、通信会員12名、休会3名、維持会員3団体の計975名・3団体。